

コロナ対策で令和2年度事業を休止

3年度事業の実施に努力

令和2年度の事業はほとんど活動休止になりました。会員の皆様には大変申し訳なく、あわせて残念でなりません。休止の理由は、私たちの生活様式を一変させた「新型コロナウイルス」です。

本会では、年数回の講演会を開催していますが、「緊急事態宣言」が発出されると、会場となる公共施設は利用できない場合があります。また「3密」の回避、さらに「不要不急の外出自粛」により、活動の休止に至りました。

本会の活動をお知らせする本紙も、休止により令和2年

度は休刊となりました。幸いです。編集作業は、「3密」「不要不急の外出自粛」の影響を回避しやすいため本号を配付することができました。今後もしっかりに努力していきます。

令和2年度事業は事実上休止していましたが、平成2年10月7日には、本会と枚方市長との意見交換会を実施しました。市からは、伏見隆市長、観光にぎわい部長、同部観光交流課長が出席、本会からは上谷勝己会長以下4人が参加し、本会の活動に関わる市の政策について意見を交わしました。

主な内容

- 令和3年度事業の実施に努力（1頁）
- 枚方偉人伝 杉澤作兵衛（2頁〜3頁）
- 鶴越古道と木津の石仏（4頁〜8頁）
- 隠岐と後鳥羽上皇（9頁〜13頁）
- 神君 穂谷・尊延寺を通過（14頁〜16頁）



第92号

発行

宿場町枚方を考える会
会長 上谷 勝己
枚方市船橋本町2-87-7
072-857-2995

編集 広報委員会



意見交換会

現在もコロナ禍にあります。が、感染状況を注視しながら、事業実施に努力しますので、会員の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

枚方ゆかりの偉人伝

社会奉仕活動家

杉澤作兵衛

小倉東町 平良一郎

杉澤作兵衛

杉澤作兵衛は、天明5年(1785年)頃に河内国交野郡田口村(現在の枚方市田口)に生れた社会奉仕活動家です。江戸時代の後期で、幕府では田沼意次が老中として権勢を振るっていた頃です。

父は七左衛門、男女六人兄弟の三男として生まれました。当時の杉澤家は、借金がかさみ生活は、困窮を極めていま

した。作兵衛は8歳の頃から、田口村氏神(現在の山田神社)へ日参して助けを祈っていました。



山田神社 (拝殿)

枚方市田口1丁目



山田神社 (参道)

16歳の時、兄弟に提案して全員で奉公に出て、給金を

得て家計を安定させることにしました。

信心作兵衛

3年余りで借金のすべてを返済し、8年後には質入れした田畑を請け戻して、杉澤家の再興をはかりました。こうして安定した杉澤家は、長男が相続して、作兵衛自身は、家勢の傾いた同族の杉澤別家を継いで、これも5年ほどで再興を成し遂げました。

元来信心深い作兵衛はこれらの家の復興は、神のおかげだと信じて、ますます信仰心を深め、誰言うことなく「信心作兵衛」という異名で呼ばれるようになりました。

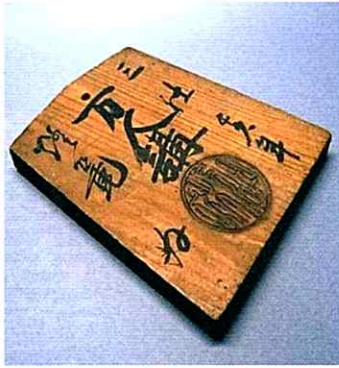
三社灯笼万人講

作兵衛は、この信仰心が高じて講元となります。三社灯

籠万人講というのは、寄付を集めて、伊勢神宮、石清水八幡宮、春日大社の三つの神社に石灯笼を寄進しようという団体です。



三社灯笼万人講木札 (個人蔵)



当初は石灯笼の寄進が目的だったのですが、講の発展とともに、道路や橋の修理など

社会奉仕活動や、さらに講員の生活扶助などの協同組合的な活動にも拡大してゆきます。



作兵衛著「三社万人講」
國學院大学河野省博士記念文庫蔵

現代では、作兵衛は協同組合の元祖として、二宮尊徳、大原幽学とともに並び称されています。

作兵衛は生涯に数多くの常夜灯を境内や街道に寄進して旅人や参詣者の安全に役立つ

ていますが、中でも有名なのは、奈良坂の常夜灯です。

奈良豆比古神社常夜燈

奈良豆比古神社の東側10mの県道754号(木津横田線)の信号の傍らにあります。常夜燈の刻印には、「文政十一年(講元河州 杉澤作兵衛 世話人講中)」とあります。



奈良坂の常夜灯

大坂東町奉行から感謝状

その後、永年にわたる作兵衛の社会奉仕活動に対して、枚方の領主で大坂東町奉行の

久貝因幡守正典から感謝状を贈られています。

享年 63 歳

旧『枚方市史』(枚方市役所1951年)には、作兵衛は石清水八幡宮への大石灯笼の材料を現地に運び、その組み立てにかかろうとする嘉永元年(1848年)10月8日に作業現場で還らぬ人となったことが記されています。享年63歳でした。

やがて作兵衛の思想は、その弟子である相模国大住郡蓑毛村(現在の神奈川県秦野市蓑毛)出身の安居院庄七(あぐいしようしち)から報徳運動家の岡田佐平治に引き継がれ、二宮尊徳の思想とともに報徳社の原点となり、現在の公益社団法人大日本報徳社に至ります。

ついでに

鴨越古道と木津の石仏を訪ねて

門真市 辻他 久雄

兵庫県神戸市兵庫区の市街地から、北区山田町下谷にある高尾山の中腹を経て、北区山田町藍那に至る道は、古くから「鴨越古道」とも呼ばれています。

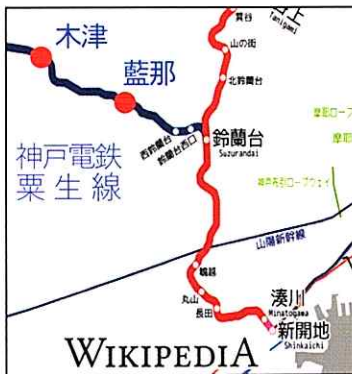
鴨越の地名は、平安時代末期における源氏と平氏の戦で有名な「一ノ谷の戦い」で、源義経による奇襲攻撃「鴨越の逆落とし」として、平家物語の中に出てきます。ただし、

その場所については諸説あり、定かではありません。



大阪府や兵庫県にまだ二回目の「緊急事態宣言」が発出

されていない時期に、神戸電鉄粟生線「藍那」び「木津」駅からの古道を歩き、その地に残る石造物を訪ねました。



訪ねると、この地域にどのような歴史と文化があるのか興味湧き、ここで少し調べたことを記してみます。そのことは、その地の石造物を理解する上で、必要だと考えるからです。

神戸市北区山田町は、西六甲連山東側(摩耶山〜高取山)と丹生山系(帝釈山系)に挟まれた場所にあります。



北区山田町の里山 (丹生山系)

この地域は、丹生山系の北側の淡河川の川筋とともに、

京都・摂津から播磨・山陽方面に抜ける裏街道としての役目を果たし、いつの時代にも人々の往来があり、結果として都の文化が早くから伝わり、豊かな地域文化が育まれたと思われま。

少しこの地域の歴史を振り返ってみましょう。奈良時代初期（8世紀初め）に記された日本書記や古事記に登場する伝説上の神功皇后（応神天皇の母）のエピソードが、丹生山の名前の由来とされています。

「山田村郷土誌」によれば、丹生という地名の起りには、播磨国風土記の記述に基づき、「国堅大神（くにかためましおほかみ・播磨国風土記での大國主大神の別称）の子、爾保都比売神（にほつひめかみ）がこの地を治めていた。神功皇后征韓の時に当たって

神誨（おつげ）を国造の女（むすめ）石坂比売に憑りて（のりうつて）告げしめ、其の山（丹生山）の丹土（赤土）を出さしむ。これより丹生の郷と称す」と説明しています。

つまり、丹生山で採れた赤土（朱砂）で衣服や武器や船を朱色に塗ったところ、戦勝したとの意味合いです。

では、丹生山と今回の古道との関係ですが、平安末期の治承4年（1180年）6月、平清盛は、高倉上皇や平家一門の反対を押し切り、福原への遷都を行います。清盛はその時、丹生山を京の比叡山になぞらえ、夢野（兵庫区）から烏原谷をのぼり、菊水山の西の谷川を北進して、丹生山に月参りをしています。清盛が烏原から山田までの山道の左側に一丁（約109m）ごとに立てた丁石（町石）

が、今も丹生山の参道に二十五基残っています。古代から中世にかけて、この地域は「山田庄」と呼ばれていた荘園で、清盛の時代は平家の所領でした。

寿永3年（1183年）2月4日、平家追討をめざす源範頼軍を大將軍とする大將軍は、山陽道（西国街道）から生田の森に向け進軍します。

一方、源義経の搦手軍は京から丹波路を経て、播磨と丹波の国境の三草山で平氏軍を撃破し、一ノ谷へと進軍します。当時、三木から福原への道は、広野を経て藍那に至り、そこから鴨越を越えて夢野（神戸市兵庫区）に至る道が一般的でした。「鴨越の逆落と」とされる場所については諸説ありますが、義経はまさしくに藍那に至り、「鴨越千鳥道」を通ったことは間違いなさそう

です。

山田にある六條八幡宮の由来には、平安時代後期、「保安4年（1123年）に丹生山田庄の領主であった六條判官源為義が、京の都六条左女牛（醒ヶ井）の自宅に祀る左女牛八幡大神を勧請合祀し、古の若宮八幡宮を再造した」とあります。

「山田庄」は、平家滅亡後に平家没官領であったものを、文治3年（1187年）源頼朝が左女牛若宮八幡宮に寄進したものととして、この地に六條八幡神社として実質的な創建に至ります。

山田には、源氏ゆかりの六條八幡神社をはじめ、丹生神社がある他、江戸時代にはこの地域において、農村歌舞伎や人形浄瑠璃が盛んとなります。それにより農村歌舞伎舞台（藍那にも農村歌舞伎の舞

台跡が残る) など、数多くの歴史的文化財が残っています。また、山田に数多く残る近江式の文様を持った石造品(宝篋印塔など)は、南北朝から室町にかけて京と西国を結ぶメインストリートであったことを物語っています。

また「藍那」には、幕末に神戸開港に備えて、外国人との衝突を避けるための西国街道のバイパス的役目の「徳川道」が通っています。石屋村(灘区・阪神石屋川付近)を起点に現在の森林公園を通り、小部、藍那を抜けて、白川村、布施畑村を経由して明石の大蔵谷まで拓かれましたが、明治維新の混乱の中ですぐに廃止されています。

では、ここで「藍那」と「木津」の説明をします。「藍那」は、摂津の国の西端で、播磨国との間にあることから、古

くは「相野」と呼ばれていました。後に「藍野」と書かれるようになり、それが転訛して「藍那」になったとのこと

です。また、藍那は、源義経が一の谷の合戦に向かった路としても有名です。直進して「鴨越」に出るべきか、白川に出て、一の谷へ軍を進めるかを迷い、作戦会議を開いたときされる「相談が辻」と呼ばれる場所も残っています。

さて、話を石仏(石造品)のことに戻します。藍那駅のすぐ山側に、七本五輪卒塔婆が道を見下ろすように建てられています。

七基のうち二基には地輪部に梵字が四面に刻まれています。五輪塔は「地・水・火・風・空」五元素の宇宙観により、仏教の五大思想の教えを表現しており、大日如来を主

尊とする供養塔として発展します。



室町時代になると畿内を中心に多くの小型五輪塔が生産されます。地輪部を長くして地中に埋め込む構造で、特に地輪部に銘文を刻むようになり、墓碑として利用されます。藍那の五輪卒塔婆は、丹生山に所在する町石(丁石)と形状が類似し、氷室町に所在す

る同型「貞治三(一二三六四)

年」銘にも類似する点などから生産の予備品であった可能性が高く、花崗岩製で南北朝時代の作と思われる。

五輪卒塔婆の横にある宝塔は、神戸電鉄の線路を敷設した時に、中央から右に移したといわれています。宝塔の笠の軒反りは、鎌倉時代の物より緩やかになり、南北朝時代の当来を告げています。



塔身は無地で扉型がなく、基礎は、現在地面に埋もれており、明確に確認することはできませんが、輪郭を巻き内

にゆったりとした格狭間を作っているときれています。

宝塔は「法華経宝塔品第11」には、靈鷲山で釈迦如来が法華経を説かれた時、忽然と地中から宝塔が湧き出て、塔内から多宝如来が声を発し、釈迦如来を賛嘆し招き入れ、併座坐したとあります。

鎌倉時代から登場し、石造の構造は、基礎、塔身(柱樽形)、笠部、相輪となつています。この塔身軸部に意匠などが刻まれる例があり、相輪は完備しています。花崗岩製で南北朝時代の作と考えられます。

神戸電鉄の線路を挟み、踏切向こうのすぐの所に、一基の宝篋印塔がぼつんと建てられています。塔身は蓮華座上月輪内に金剛界四仏の種子、正面(アク・不空成就仏)、東面(ウーン・阿閃如来)、南面

(タラク・宝生如来)、西面(キリク・阿弥陀如来)を刻んでいます。塔身の刻銘が、浅くて弱い、笠の隅飾りの傾きが南北朝後期という時代を反映しています。

基礎上端は複弁反花、側面は四面とも輪郭を巻き。内には格狭間を作っています。笠は、下二段、上六段、隅飾は二弧輪郭付きで内は無地、やや外傾しています。相輪は下から、伏鉢、請花、九輪、請花、宝珠で、九輪頂部に折損の痕が見えますが完存しています。地元では紫式部の墓との伝承があります。



宝篋印塔 (紫式部墓?)

この宝篋印塔には、「永和二年(一三七六)七十四」の銘があり、北朝の年号が確認できます。「七十四」とは七月十日ということ、このような表記がこの時代の特徴です。

藍那では、もうひとつ宝篋印塔(藍那の辻)辺りにあるを訪ねましたが、こちらの方は和泉式部の墓との伝承があります。



宝篋印塔 (和泉式部墓?)

藍那の辻」へ向かう途中、駅からの急坂を上り、藍那の集落から里山の細い山路を訪ね歩いて折、急な雷雨に見舞われました。雨煙で前から

霞んで見えないほどの雨と、坂道を滝のように流れてくる雨を民家の倉庫の軒下で避けながら、30分ほど晴れ間が戻るのを待ちました。

次に訪ねた「木津」も、摂津・播磨の国境に近く、東播磨から鴨越を経て、兵庫津への交通路だったため、道標や行路の安全を祈願して彫られた磨崖仏などが残っています。



磨崖仏が彫られている崖

木津の磨崖仏へは、木津駅から南東方面にのどかな稲穂



磨崖仏

が揺れる田園の道を歩きました。明石郡四国八十八箇所寺を巡る古道沿いに、今も数多くの道標が見られます。磨崖仏のある岩壁は礫岩質、高さ約5.63m、長さ約100mの崖台地状。上部は細粒の砂岩質の岩盤。高さ約32cm、幅約2.2mにわたって彫り凹めた中に、阿弥陀如来坐像と六体の地藏菩薩を厚彫りの陽刻

真ん中に像高約42cmの阿弥陀如来坐像、左右対称に三体ずつの像高約25から29cmの地藏菩薩が配置されています。左端に3行に分けて「丁亥ノ石大工兵衛ノ文正二(一四六七)天」銘文があり、室町時代中期の作と考えられています。このように石大工「兵衛」の名前が記されている例は希です。



磨崖仏が刻まれている岩塊の上面は平滑で、まるで舗装したような広場になっています。

阿弥陀坐像の顔面から肩にかけてと、右端の地藏顔面に剥離痕跡がみられますが、他はほぼ完在しています。また、阿弥陀像の胸と膝、その左右一体の地藏の衣文に、墨書で衣文の輪郭を描いた跡がわずかに残されています。600年近い歲月守り続けられてきたことは、この地域での人々の信仰の深さと、伝統文化を大切にしている思いの長けを感じます。今後とも大切に守ってほしい文化財のひとつです。

木津集落では、伊勢講の伊勢参りの時などに、この岩の上まで送迎する風習が明治時代まで残っており、これを「サカムカエ」と呼んでいたそうです。

近年になり、自動車道路が近くを通るようになりましたが、藍那、木津どちらの集落

とも、まだまだのどかで、田畑や山林など自然がたくさん残っている里山です。またそれぞれの季節に訪れてみたいと思っています。

身近な文化財として野にある石造品、どこにでもある道標、石仏を通して歴史に触れることができます。街道や集落を訪ね歩くだけでも、そこに遺された歴史を読みとることができるとは思いません。

【参考文献】

- 辻尾榮市「石仏考古 調査報告資料546号」
- 神戸市「みんなの行政地図 北区・西区」
- 神戸市H・P (文化スポー ツ局文化財課)
- 「日本石仏図典」(日本石仏協会・図書刊行会)
- 「山田村郷土誌」
- 「六條八幡宮H・P 御由緒書」

承久の乱から800年

隠岐と後鳥羽上皇

三栗 石川 勲

令和3年(2021年)は、承久の乱(1221年)からちょうど800年になります。

後鳥羽上皇が配流(島流し)された隠岐の海士町(中ノ島)では後鳥羽院顕彰事業実行委員会(委員長/海士町長)を設立、各種事業を予定しています。

本稿では主に隠岐と後鳥羽上皇について紹介します。なお、隠岐での称号は法皇ですが、本稿では最も在位期間の

長い「上皇」とします。(施設の固有名詞などを除く)

隠岐

島根半島の北約60kmの日本海にある島根県の島々で、一般的に隠岐諸島と呼ばれています。

有人島は4島で、一島一自治体。アクセスとしては、フェリー、高速船、飛行機があり、私が参加したツアーでは伊丹

空港から隠岐空港に向いました。約1時間の飛行です。



島々は島前(どうぜん)と島後(どうご)に分けられ、最も大きい島は島後で面積242km²、行政的には「隠岐の

承久の乱

日本史上初の朝廷と武家政権の間に起こった武力闘争です。12世紀の末期から13世紀初頭にかけては、西日本を支配する朝廷と、東日本を支配する武家政権の鎌倉幕府との二元政治の時代でした。朝廷内には武家政権への反感が募っていましたが、清和天皇(第56代)の血を引き、朝廷

島町」で人口1万3324人(2021.5.1現在)、隠岐諸島の行政・経済・交通の中心です。ちなみに、韓国が実効支配している竹島は「隠岐の島町」の町域に属していません。

島前には3島の有人島があり、後鳥羽上皇が配流されたのは中ノ島(32km²)、全島が「海士町(あまちょう)」です。

にとつて身内ともいえる源氏が鎌倉幕府を率いている間は武力衝突に至りませんでした。

しかし、初代源頼朝の死後、二代頼家と三代実朝が暗殺され、執権職の北条氏が実質的に鎌倉幕府を手中に収めるに至り、皇権の回復を望む朝廷と幕府の対立が深まり、ついに承久3年(1221年)5

月14日、後鳥羽上皇は北条義時(第二代執権) 追討の院宣(上皇の政治意思の明示)を出しました。朝敵となった鎌倉の御家人は動揺しましたが、

涙ながらに頼朝の恩顧を訴え、団結を促したのが尼將軍と呼ばれていた北条政子(源頼朝の正室)です。最終的に19万人にもなった幕府軍は、朝廷側の最終防衛ラインである宇治川を突破、6月14日に京へ攻め込みました。

乱の戦後処理として、首謀

者の後鳥羽上皇は隠岐へ、順徳上皇は佐渡へ、計画に反対だった土御門上皇は望んで土佐に配流されました。以後、幕府は皇位継承にも影響力を持ち、幕府主導の政治体制を固めました。

後鳥羽上皇

高倉天皇の第四皇子です。

二位尼(にいのあま)と呼ばれた平時子(たいらのときこ) / 平清盛の正室)に抱かれ、壇ノ浦で入水(じゅすい)した安徳天皇(高倉天皇第一皇子)を継いだ第82代天皇です。

寿永2年(1183年)に即位(安徳天皇との重複期間あり)、建久9年(1198年)まで在位し、第一皇子の土御門天皇(第83代)に譲位しました。しかし、上皇として院政を敷き、土御門天皇では幕府との関係が心許ないと見て

退位を迫り、異母弟である第三皇子を順徳天皇(第84代)として即位させています。



国宝 紙本着色後鳥羽天皇像

隠岐に配流される前に、生母である七条院(藤原殖子/坊門殖子)へ送るため藤原信実を描かせたといわれている。

水無瀬神宮蔵。現在、京都国立博物館に寄託。

承久の乱の後、首謀者として隠岐へ配流され、延応元年(1239年)に同地で崩御しました。なお、配流される

直前に出家し、法皇となっております。

文武両道に秀で、中世屈指の歌人といわれ、自身も親撰するなど、新古今和歌集の編纂に深く関わっています。失意の隠岐においても多くの和歌を詠んだといわれています。藤原定家の明月記によると、元久2年(1205年)には渚院(枚方市渚本町)に行幸しています。

隠岐へ配流

後鳥羽上皇は承久3年(1221年)7月13日に都を出発、8月5日には出雲国の大浜湊(現在の美保関港)を出港、同日の深夜に隠岐の中ノ島に到着しました。ただ、時化のため行在所となる源福寺の近くではなく、島の南端部にある崎の湊に上陸しました。

休息中、側近が今夜の宿舎にしようとならと交渉しましたが、畏れ多いと断られ、近くの三穂神社を宿舎としました。上陸地には「後鳥羽上皇御着船の地」、「後鳥羽上皇御腰掛之石」、三穂神社には「後鳥羽上皇御駐泊址」などの石碑があります。



中ノ島（海士町）

空港は島後にあるため、来島にはフェリーを利用しました。町域は33.44km²、他の離島と同様に人口減少が続

いていましたが、2010年以降はほぼ横ばいになり、現在は2303人（2021.5.1現在）。訪問した後鳥羽上皇ゆかりの史跡は、上陸地より北側に島の北西部にあります。

後鳥羽院資料館

ツアーで最初に訪れたのは「海士町後鳥羽院資料館」です。海士町歴史民俗資料館として昭和55年（1980年）に開館、平成20年（2008年）に海士町後鳥羽院資料館と改称しました。後鳥羽上皇の資料や遺品を中心に、中ノ島から出土した考古資料、近世の民俗資料が展示されています。特に多くの刀剣が展示されており、作刀まで行ったという後鳥羽上皇の強い探究心を知ることができます。その理由は、三種の神品（じ



んぎ）のひとつ、「天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）」なき即位への負い目にあつたともいわれる。

館内には前述の「国宝 紙本 著色後鳥羽天皇像」と「国宝 後鳥羽天皇宸翰御手印置文」の複製品が展示されています。係員の方から「実物はどこにある（所有者）か、ご存知ですか」と質問がありました。ツアーの同行者が誰も返事をしないので、私が「水無瀬神宮」と答えました。



国宝 後鳥羽天皇宸翰御手印置文（展示の複製品）

上皇が延応元年（1239年）に崩御する13日前に書いた自筆の遺言状。勅命により水無瀬殿を守っていた母方の水無瀬信成・親成の父子に宛てた遺命で、手形が鮮明に付されている。宸翰とは天皇の自筆、置文は遺言の意味。水無瀬神宮蔵。京都国立博物館に寄託。

後で係員から「よくご存知でしたね。お答えになる方は希なのですよ」と褒められた

のですが、「実は、妻の実家が水無瀬神宮の近くにあるんですよ」と正直に伝えました。すると「水無瀬神宮に行ったとき、皆さん、手水舎で水を汲んでおられましたか、なぜですか」と再質問を受けました。「あれは『離宮の水』といって、環境庁の『名水百選（昭和60年）』に選ばれたんです。土日は並んでおられます」と雑談に花を咲かせました。

水無瀬神宮

大阪府三島郡島本町にある神社です。隠岐で崩御した後鳥羽上皇の遺勅により仁治元年（1240年）、水無瀬信成（父は後鳥羽上皇の外叔父藤原信隆）・親成親子が後鳥羽天皇の離宮、水無瀬殿の跡地に御影堂を建立し、上皇を祀ったのが始まりです。明応3年（1494年）、後土御門天皇



水無瀬神宮

（第103代）が隠岐から後鳥羽上皇の神霊を迎え、水無瀬宮の神号を奉じました。江戸時代まで仏式で祀られていましたが、明治時代に神式へ改められ、土御門天皇、順徳天皇の神霊も配流地から迎えて合祀されました。

明治4年（1871年）の太政官布告による近代社格制度では、明治6年に官幣中社、昭和14年には官幣大社に列格し、水無瀬神宮と改称されました。

近代社格制度とは神社の格を等級化、現代風にいえばランキングを定めたものです。まず、官社と諸社に分けられ、官社の最高ランクが官幣大社、その下が国幣大社、官幣中社…と続きます。水無瀬神宮の境内は決して広大ではありませんが、大阪府下に五社しかない官幣大社のひとつです。

枚方から最も近い官幣大社は「石清水八幡宮」、ちなみに世界文化遺産の「厳島神社（宮島）」は官幣中社です。なお近代社格制度は、昭和21年のGHQ指令により廃止されましたが、現在でも「旧社格」として、神社の格を表す目安になっています。

後鳥羽天皇火葬塚

後鳥羽上皇は延応元年（1239年）、隠岐の中ノ島にお

いて崩御、60歳でした。火葬後に埋葬され、遺骨は現在の火葬塚に納められました。海士町後鳥羽院資料館駐車場の向かいに入口があります。



明治6年、明治天皇の勅慮（思し召し）により、上皇の御霊は現在の大阪府島本町の水無瀬神宮に奉遷、遺骨は京都市左京区の後鳥羽天皇大原陵に埋葬されました。

翌7年、江戸時代の末期に建てられた祠殿は取り壊されましたが、その後は宮内庁が後鳥羽天皇火葬塚として管理

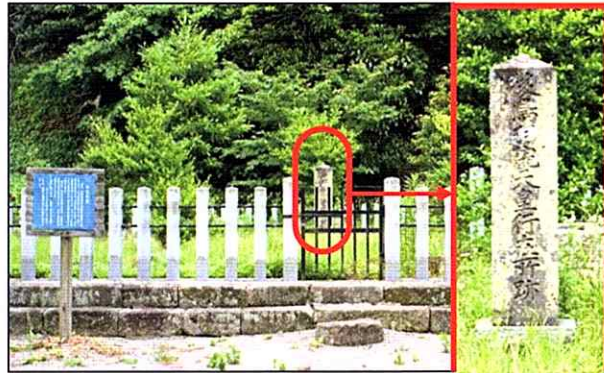
しています。なお、火葬塚の本体は白壁（左写真）の向こう側にあります。



後鳥羽院天皇行在所跡

後鳥羽上皇が失意のまま崩御するまでの18年余りを過ごした場所。当地の真言宗源福寺が行在所(天皇の仮住い)となっていました。明治2年(1869年)の廃仏毀釈により廢寺となりました。(隱岐神社の近くに再建)

現在、行在所跡説明板の後ろにある玉垣で囲まれた場所には「後鳥羽院天皇行在所跡」の石碑が立っています。



隱岐神社

海士町にある神社で、祭神は後鳥羽上皇です。島根県が昭和15年の紀元2600年

の奉祝事業として創建したもので、完成は昭和14年。この年は後鳥羽上皇の崩御700年に当たりました。旧社格は諸社のひとつである県社。



隱岐神社 (拜殿)

境内は5万6000㎡、隱岐最大の敷地を有する神社です。ガイドさんは「参道は桜の名所」と紹介してくれましたが、桜の季節でもなく、祭礼日でもないためか、全体的に何か殺風景。神域で飾り立てる必要はありませんが、同

趣旨のブログがあり、「元官製神社」との皮肉がありました。

後醍醐天皇

冒頭、「令和3年は、承久の乱から800年になります」と紹介しましたが、後醍醐天皇(第96代)が起こした「元弘の乱」からは690年になります。後鳥羽上皇の例にならい、隱岐に配流されましたが、どの島に配流されたのか、その行在所については二説があり、学術上は決着していません。国(文部科学省)は南北朝時代に編纂された「増鏡」などの記述から島後の国分寺を、島根県は太平記などをもとに中ノ島の西側にある西ノ島(西ノ島町)の黒木御所跡を史跡に指定しています。

いずれにしろ、後醍醐天皇は在島1年で隱岐を脱出、歴史は南北朝時代を迎えます。

神君 穂谷・尊延寺を通過

交野市 堀家 啓男

本能寺の変の直後、徳川家康が堺から伊賀を通って領国である三河への脱出を「神君伊賀越え」と呼ばれていま

す。堺見物を終えた天正10年(1582年)6月2日、松井友閑屋敷から京都に向かっ

ていた徳川家康が、茶屋四郎次郎らから「本能寺の変」による織田信長父子生害の知らせを受けたのは、同日、主従30人余が生駒山系の山すそ、

「山ノ子(ね)キ」を進んでいた頃だといわれています。

この知らせに家康はショックを受け、「信長様を追って切腹する」と騒ぎ、一悶着となります。ようやく冷静になった家康は、ここから直ちに三河への直帰を決断します。

神君伊賀越えの序章

家康自身が「生涯第一の難題」と称した決死行、「神君伊

賀越え」の幕開けです。ここ

ではその前段、河内国から生駒山系を縫って、その日、宿泊した宇治田原の土豪山口玄番館に八ツ時分(午後2時頃)に着くまでの序章を取り上げます。これは鍵屋資料館の学芸員、片山正彦先生の寝屋川での講演をお聞ききして思いついたことです。

片山先生のレジメにある「石川忠総留書」、忠総は後に膳所藩主などを務め、重臣石

川数正の一族でした。家康に随行していた縁者から聞き書きしたとのことで、信頼できる史料だそうです。道のりとして、「堺、平野、阿部、山ノ子キ、ホタニ、尊念寺、草地、宇治田原、行程三十里」と著しています。

「阿部」は「阿倍野」を、「山ノ子キ」は生駒山地の裾をいく東高野街道とのことで、「山ノ子キ」の次に「ホタニ」「尊念寺」が出ています。これは枚方東部の「穂谷」「尊延寺」の地名と考えられ、「神君伊賀越え」の行程で通過したことは明らかです。「山ノ子キ」のいずこかで生駒山系に入り、山越えし、「ホタニ(穂谷)」に出たらしいことが考えられます。しかし、山に踏み入った場所、行程がはっきりしません。「山ノ子キ」が具体的にどこなのか。

東高野街道は、生駒山系の山すそを、大東、四條畷、寝屋川、交野と北上しています。交野では、私部で本街道と山すそをいく山根街道に分岐します。今は「上の山の辻」と呼ばれているこの場所を「山ノ子キ」と特定することは難しいようです。それだけに想像は膨らみます。



交野では一行が、東高野街道を星田村近くで外れて、山系越えのため、妙見坂の藪で

案内人待の間、潜んでいたという「伝家康ひそみの藪」という新説が出され、石碑が立てられています。村に残る伝承に基づくようです。



「山ノ子キ」は「津田」?

当時、家康に随行した永井万之丞(家康主従のうち永井姓は直勝のみ、後に初代古河藩主となります。淀藩主尚政の父)が残した史料「譜牒余録」には、「津田の在所より、こたに、そねんしを経て、宇治田原へ御出」とあります。つまり一行が茶屋らの知らせ

を受けたあと、「山の子キ」を「津田の在所」までやってきて、ここから山系越えに踏みこんだように解釈できます。家康に随行した侍による確かな史料です。

「津田山を越えた」?

「津田の在所」を北上すれば、光秀の影響を受けた招堤あたりになり、危険ですし、東、田辺街道を行くと集落が現れるのは尊延寺が先ですので、各史料の行程とは異なります。

ここからは筆者の想像ですが、一行は「津田の在所」から、すぐに「津田山(地元の呼び名/国土地理院は国見山)」に入り、尾根伝いに進み、三之宮神社(近世は屋形大明神)のある穂谷付近に現れたと考えてはどうでしょうか。



枚方の歴史(馬部隆弘他著松籟社)によれば、津田郷には信長の恩恵を受けた土豪が数多くいたとのこと。彼らが信長の同盟者であった家康の三河帰還に協力をすることは想像でき、日頃、津田山の管理を行い、隘路まで熟知していた土豪の案内を得たことは十分考えられます。

「神君、伊賀越え」の前に、「神君、津田山越え」があったのではないか。これが事実

なら枚方の歴史にとって大きな出来事です。江戸時代、二百六十余年の誕生の岐路が津田山かも知れないからです。

家康は、後に伊賀越えで協力した武将に礼状を出しており、徳永寺には土地を与えています。津田周辺の旧家などから家康通過に関する古文書や案内の記録が出てくれば

「神君、津田山越え」は確かなものになります。しかし、疑問も生まれます。幕藩体制成立後、津田の領主となった旗本久貝氏は忠実な家康の家来でしたから、自領に主君に関するこんな誇らしい事実があるなら見逃すはずはなく、徹底的に調査し、顕彰碑のひとつでも建立していることでしょう。残念ながら領内のどこにも見当たりません。久貝家の殿様は、自領の倉治では、源氏滝の顕彰碑を村

に建立させる領地思いの殿様でした。残念ながら、現在のところ「神君、津田山越え」は夢幻の可能性があります。確たる史料もなく、新たな偽史を作ることはできません。星田か、津田山か、それとも他か、神君、生駒山系越えの謎はまだまだ解けません。

「穂谷・尊延寺」通過は明らか

幕初、淀藩主となった永井尚政（家康に随行した万之丞の子）の領地となった穂谷、尊延寺村では、神君や、尚政の父、万之丞の村内通過について話題となったという近世の歴史はなさそうです。偽書によるありもしなかった歴史を追い求めるより、せめて「神君、穂谷、尊延寺を通過」の確かな史料、コースなどを明らかにし、改めて地元で顕彰

できればいいな、と思います。家康主従が伊賀越えに至る前、東高野街道から宇治田原までわずか半日たらずで、しかも、真つ昼間、東高野街道から、人目を避けて山間部に入り、「穂谷」、「尊延寺」を通過したという、神君、命がけの決死行の序章に枚方東部が関わっていたというのは痛快なことです。

機関紙の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありませんが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

ホームページを開設しました

本会をよりご理解、ご賛同をいただくため、事業内容、入会案内などを掲載しています。

HP <https://syukubamachi-hirakata.com>

宿場町枚方を考える会



検索してね！

